

台湾における青年層の日本語学習意識

岡本輝彦

1. はじめに

台湾は1895年から1945年までの50年間日本の統治下であり、その間日本語教育が推進された。その結果、台湾人の日本語理解率は1941年当時57.01%までに達したと言われている（鐘1993：208）。戦後、台湾を接収した中華民国は公用語を日本語から中国語に転換したが、当時「中国語がわかり書ける者は百人中一人、二人いる程度である。三十歳以下はもう駄目である。二十歳以下に至っては、閩南語さえ完全には話せず、日本語ほど流暢には話せない」（甲斐1997：6、引用は『新台湾』16による）状況であったため、政府は中国語の普及の障害になるとして日本語の使用を禁止した。しかし、日本語は「忘れにくい言語」であると考える老年層の人々も多くおり、現在でも日本語を使用している場合も少なくないという報告も見られる（甲斐1997：9）。また、近年政府の日本語に対する政策の変化もあって、日本語は若い世代にも人気を得るようになり、積極的に「テレビ番組」、「CD」、「アニメ」を視聴している。こうした若者は日本に対して肯定的に評価している場合が多い（石井2001：64）。そこで、このような青年層の日本語学習者は日本語学習をどのように捉えているのであろうか。近年日本語学習者が増加しているが、財団法人交流協会の調査によると、日本語教育の中心となっている高等教育における日本語学習者数は台湾南部地域が最も増加率の高い地域だということである。（交流協会2010：17）しかし、これまで南部地域に限定した調査はほとんど行われていない。そこで、今回南部地域の日本語学習者を対象に調査を実施した。

2. 先行研究

台湾の日本語学習意識については鮫島（1993）、落合（1995）、国立国語研究所（1999）、交流協会（2010）などがある。鮫島は台湾中部にある商業専科学校（日本の5年制高等専門学校に相当）で第二外国語として日本語を履修している5年生164名を対象にアンケート調査を行った結果、学習意欲は日本語の学習に影響を与え、学習意欲を失わせれば日本語学習は困難になるとしている。また、「会話を勉強したい」という学生が大半を占めていることから、日本語で日本人とコミュニケーションを図れるような教育の必要性を指摘している。落合は台北にある淡江大学日文系二年生150名を対象にアンケート調査を行った結果、「日本と日本人へのイメージ」は学習の受容に影響を与えているとし、学習者は日本語によるコミュニケーション能力の向上に関心を払っていることを明らかにした。一方、国立国語研究所の調査では日本語学習者334名に対してアンケート調査を行った結果、「日本語学習の意向」継続の理由として最も多い回答は「日本での旅行を楽しむため」、次に「おもしろそうだから」、「コミュニケーションに必要」と続く。これらのデータから台湾の日本語学習者は日本語でコミュニケーションができる能力の獲得を目指していると言えよう。

3. 南部地域の高等教育機関における日本語教育

南部地域は第二の都市である高雄を中心に、台南、嘉義、屏東を含む地域である。上述のとおり日本語学習者数が台北を中心とした北部地域¹⁾では-1.3%減少したのに対して南部では5%増と増加傾向を示していることが指摘されている。（交流協会2010：17）

台湾においては、上述のとおり戦後日本語の使用は禁止されていた。1952年日中講和条約が調印され日台の国交が回復すると、政府の日本語教育に対する政策が徐々に緩和され1963年に初めて大学に日本語専門課程が設立されてから、台北を中心に本格的に日本語教育が行われるようになった（岡本・小島1997：19-20）。南部地域は日本語使用が多かったため、長らく日本語の専門的な教育は行われてこなかったが、1990年に文藻外国語文専科学校（現文藻外語学院）に日本語専門課程が設けられ、現在では日本語専門課程を有する大学は21校にまで増加した²⁾。その多くが技術系大学³⁾であり、「応用日語系」、「応用日語学系」「応用外語系日文組」⁴⁾といった学科を設立している。最近では総合大学にも応用日語系が開設されるケースがあるが、そこでは実用的な日本語教育が行われており、これが南部地域の日本語教育の特徴だと言えよう。そのほかにも多くの大学の特に国際貿易系や企業管理系といった学科で選択科目として日本語のクラスが開講されている。

4. 調査の概要

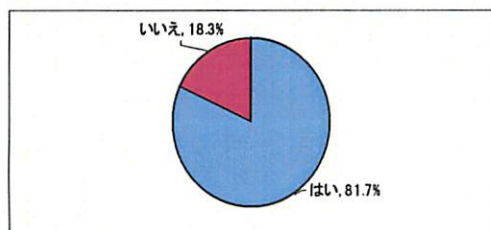
- ①調査実施期間：2009年8月～9月
- ②調査対象：南部地域にある大学の日本語学習者⁵⁾
- ③調査人数：832人（男性31.3%女性68.7%）
- ④調査方法：アンケート形式による調査。設問は2009年3月に予備調査を行い、その結果を基に作成した。調査票は全て中国語訳を用いた。

5. 結果と分析

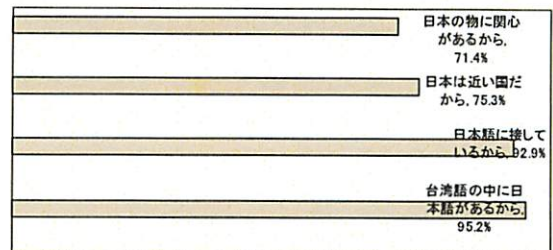
5.1. 外国語としての日本語

台湾人学生はどのように日本語を捉えているのだろうか。

Q1. 日本語は身近な言葉だと思いますか。



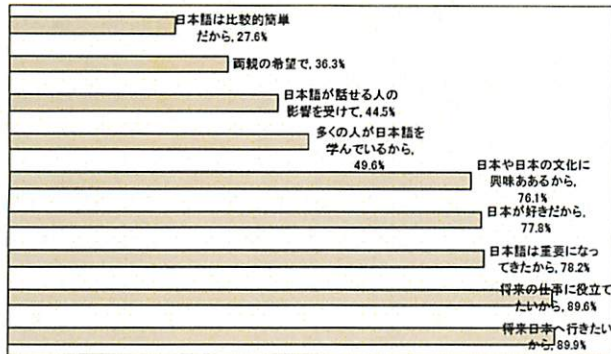
Q2. どうして日本語が身近な言葉だと思いますか。



この結果から日本語学習者の多くは日本語を身近な言葉だと思っていることがわかるが、その理由は「台湾語⁶⁾の中に日本語があるから」という回答が最も多かった。50年にわたる日本の統治下における国語教育によって普及した日本語は、現在台湾で話されている台湾語や中国語⁷⁾の中に様々な変遷を経て取り込まれている（丸川2000：30）⁸⁾。例えば、「オートバイ」は和製英語であるが、それが台湾に入り台湾人の間に定着したものである。また、「ウンチャン」という日本語も同様であるが、外省人が「運将」と表記し使用するようになった。そして、台湾語はもともと中国語の中古音であり、当時中国大陸で使用されていた漢字を音とともに日本に持ち帰り使用したため、「簡単」のように全く日本語と同じ語彙も存在している。このように日本語が日常生活で見聞きすることが多いため、日本語が身近に感じられるのであろう。次に「日本語に接しているから」、「日本は近い国だから」といった理由が続く。上述のとおり、台湾は50年間日本の統治下にあったという特殊な事情がある。戦後日本語の使用が禁止されたが、戦前日本語教育を受けた「日本語世代」と言われている老年層の人々が現在でも日本語を使用していること、1990年代に入ると日系デパートをはじめ多くのデパートで様々な日本の商品が見られ、日本の歌も流れるようになったことなどから日本語が身近に感じられるようになったことが考えられる。また、CMなどを通して流入した「かわいい」「おいしい」といった言葉も若い世代を中心に気軽に使われているからであろう。そのほかにも台湾から距離的に近いことも関係していることが言えるのではないだろうか。

5.2. 日本語学習の目的

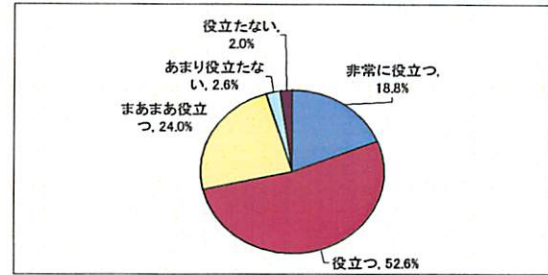
Q 3. 日本語学習の目的は何ですか。



日本語の学習目的としては「将来日本へ行きたいから」という理由が最も多く、次に「将来の仕事に役立てたいから」「日本語が重要になってきたから」「日本が好きだから」「日本や日本の文化に興味があるから」と続く。「将来日本へ行きたいから」という理由は1980年より海外旅行が自由化されてから、日本を訪れる台湾人は年々多くなり、法務省出入国管理統計統計表（2011）によると2010年度に日本を訪れた台湾人は、1,311,052人である（法務省：2011）。これは日本に関する情報量の増加、地理的条件等から日本に対する関心が高まったこと、それに加え、1980年代よりGDPが上昇し中間層が増加したことにより生活に余裕ができたこと、ビザが不要になったことなどから日本への渡航が容易になり日本を訪れることができるようになったことなどが日本語学習に結びついたのでないだろうか。また、「将来仕事に役立てたいから」という理由は日本語が使える仕事に就きたいという実利的な目的を示していると言えるだろう。1970年代後半以降高度経済成長期を迎えると日本との経済的な結びつきが強くなった。1980年代には台湾は、日本との経済貿易交流はさらに活発になり日系企業の進出、日台合弁会社の設立も盛んになった。このことで「日本語が重要になってきたから」という理由からも明らかなおと、日本語の重要性が高まったことが日本語学習を始める背景にあることが考えられる。さらに、日本が好意的に捉えられ日本に関心を持たれるようになったことが日本語学習に繋がっている。これは先行研究と同様の傾向が見られた。

5.3. 日本語の有用性

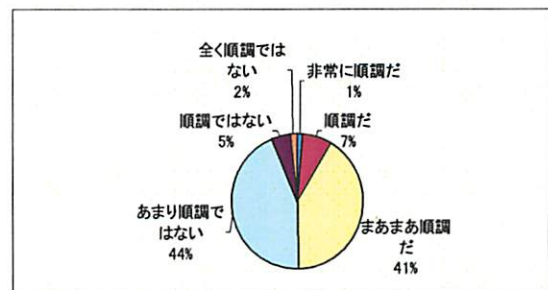
Q 4. 日本語の学習は役立つと思いますか。



日本語学習の有用性については「非常に役立つ」「役立つ」「まあまあ役立つ」を合わせると95.4%を占め、ほとんどが日本語学習の有用性を認めている。これは日本語の学習目的で「日本語は重要になってきたから」という理由が上位にあることから、日本語の重要性の認識が日本語学習にも繋がっていることがわかる。また、前にも触れたとおり従来日本と台湾は経済的な結びつきも強く、「将来仕事に役立てたい」という実利的な目的から日本語学習が必要だと思っていることが考えられる。

5.4. 日本語の学習の満足度

Q 5. 日本語の学習は当初の目標どおりに進んでいますか。

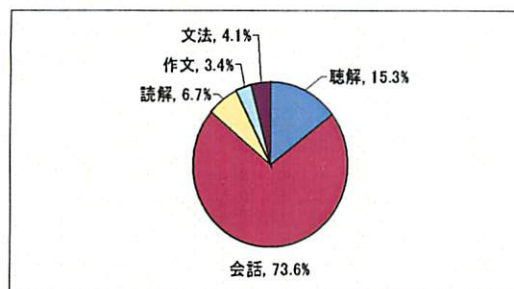


日本語の学習は「まあまあ順調ではない」が最も多かったが、台湾では専門課程の場合、週8～10時間、選択科目の場合は週2～3時間の日本語教育が行われているが、一般に日本と比べ日本語の授業時間は少ない。そのため、あまり順調に進んでいないと感じているのではないだろうか。それに対して「まあまあ順調」と考えている学習者は日本語能力試験のような資格を取得することを目標としており、合格すれば「まあまあ順調」と考えているのであろう。

5.5. 日本語学習

5.5.1. 重点項目

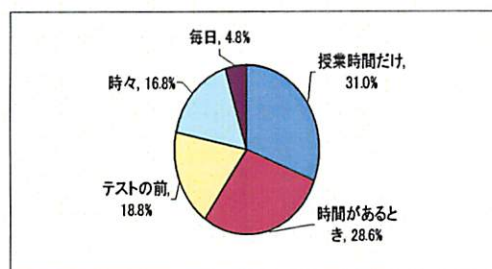
Q 6. 日本語を学習するとき、何に重点を置いていますか。



この結果から学習者が日本語学習に何を求めているかが明らかになった。学習前には目標なり目的をもっていたと考えられるが、学習を始めてからは先行研究と同様に「会話」に重点を置いていることがわかる。一般に技術系大学の応用日語系では総合大学の日本語文学系とは異なり、これまで実用面での教育を重視してきたため、学習が進むにつれ、実用面で一番学習成果が表れる日本語によるコミュニケーションができる能力の向上を求めるようになったのではないだろうか。多くの教育機関においては会話の授業は日本語専門課程では週2～3時間程度で、上述のとおり1クラス20名から50名という多人数であるため発話できる機会は限られている。また、第二外国語の選択科目の日本語クラスには会話の授業がない教育機関もあるため、学習者は授業以外にも会話に学習の重点を置いているのであろう。

5.5.2. 授業以外の学習時間

Q 7. 授業以外で日本語学習にどのくらい時間を割いていますか。

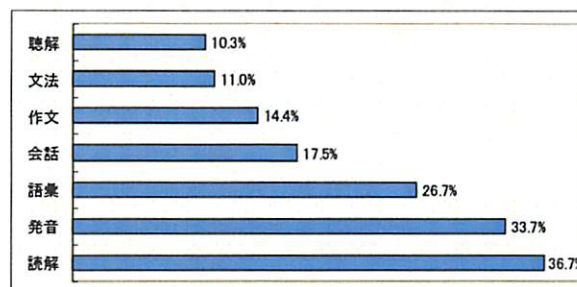


授業以外の学習時間については「授業の時間だけ」という回答が最も多い。次に「時間があるとき」、「テストの前」と続く。「授業の時間だけ」

け」は消極的な姿勢も見られる。これは学校によっては授業で出される課題も多いが、課題は授業以外の学習には含まれていないと判断したためであろう。次は「テストの前」「時間があるとき」は日本語の授業以外にも多くの教養科目の課題もあるため、日本語だけに集中するわけにはいかないという事情が背景にある。

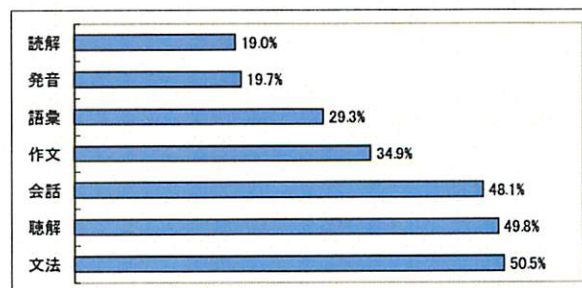
5.5.3. 日本語学習の難易

Q 8. 日本語学習で何が最も易しいと思いますか。



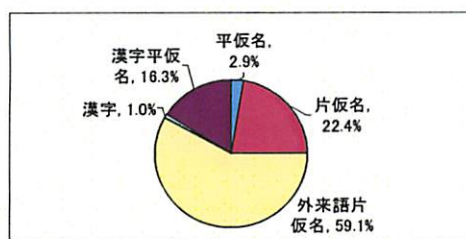
ここでは「発音」が最も容易だと考えている学習者が多かったが、これは日本語は表記どおりに発音されるからであろう。また、中国人学習者が陥りやすい清濁音の弁別は台湾語に清音も濁音もあるため、台湾人学習者にとって比較的容易に感じられることもその一因であろう。しかし、「ら行」「ぎ行」や長短音の弁別が困難なことなどの傾向が見られる。次に「読解」の回答が多く見られた。これは多人数クラスのため受身の授業形態に慣れており、授業も読解に重点が置かれていることが多く、日本語には漢字があることで、意味が推測できると考える傾向が強いとしているためであると指摘されている(篠崎2000:75)。

Q 9. 日本語学習で何が最も難しいと思いますか。



「文法」が日本語学習で最も難しいという結果となったが、日本語には助詞の用法や助動詞の活用、テンス、文末の決定性などの日本語の特徴があり、中国語とは異なる点があるためであろう。次に「聴解」、「会話」と続くが、授業では上述のとおり多人数クラスのため日本語によるコミュニケーションの機会が少ない。その上、台湾人教師が担当する授業内では使用される言語は中国語が中心となるため、日本語で話したり聞いたりする機会も少ない。また、教室を一步出ると中国語や台湾語の環境になるので、日本語でコミュニケーションできる場面が極めて少なくなってしまうため、「聴解」「会話」の能力を向上させることを難しいと感じるのである。

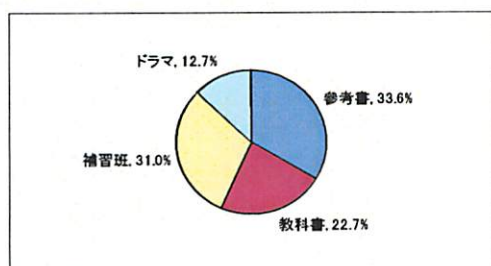
Q10. 日本語の表記で何が最も難しいと思いますか。



日本語表記で一番難しいと感じているのは「外来語の片仮名」が最も多かった。これは本来の音に対する日本人学習者と台湾人学習者の弁別の差によるものであろう。一方、予想どおり漢字は難しいとは思われていないが、これは意味が推測しやすいためであろう。しかし、台湾では繁体字が使用されているので、書く場合、その混用による誤りを生じやすいという問題点も指摘できる。

5.5.4. 学習方法

Q11. 授業以外でどうやって日本語を学習していますか。

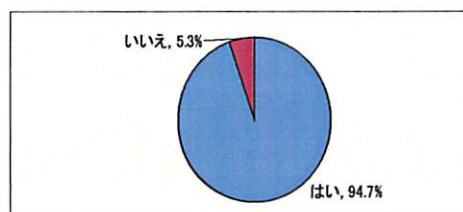


授業以外の学習方法としては「参考書の使用」が最も多いが、近年日本で出版されている文法書を中国語に翻訳したものや日本語能力試験対策の文法解説書などが数多く出版されており、教科書による授業だけでは不十分だと考える学習者が利用していることが考えられる。次は「補習班」⁹⁾であるが、ここでの日本語クラスは少人数（10人程度）であり、日本人教師も多い。「補習班」での学習は日本語によるコミュニケーション能力を向上させたいという意志の表れであろう。「ドラマ」による学習については、テレビや映像ソフトなどで日本の番組が視聴できるが、ほとんどの場合字幕がついている。最近では日本のドラマの字幕を利用して学習するスタイルも増えている。

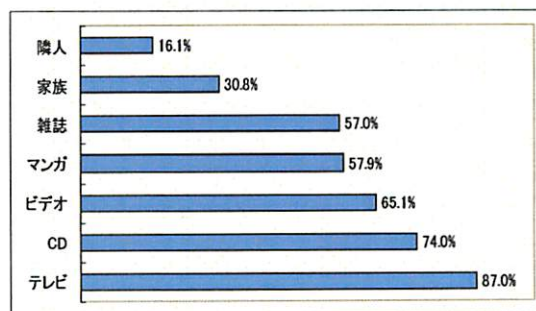
5.6. 日本語との接触状況

5.6.1. 日本語との接触

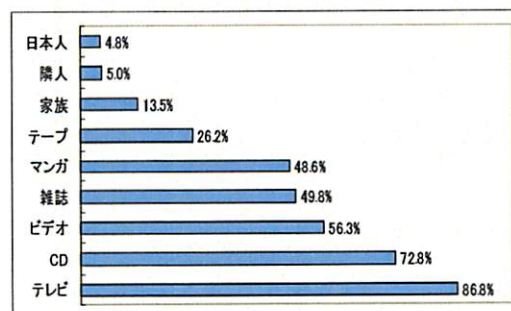
Q12. 日本語を学習する前に日本語に接していましたか。



Q13. 日本語を学習する前にどのようなものを通して日本語に接していましたか。



Q14. 日本語を学習するようになってから、どのようなものを通して日本語に接していますか。

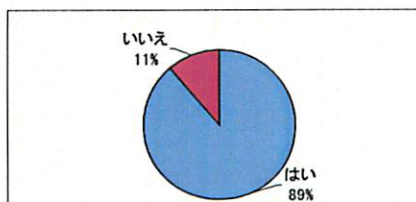


日本語の学習を始める前に日本語に接したことがあるかという設問については94.7%が日本語に接したことがあり、そのうちテレビを介して日本語に接した学習者が87%と最も多い。次にビデオ、マンガ、雑誌と続く。また、「学習前の日本語との接触」と同様に日本語を学習するようになってからもテレビから日本語に接するという回答が最も多い。1945年以降政府は中国語の普及政策により脱日本化を進めてきたため、1962年に開局された台湾テレビをはじめとする地上波テレビ¹⁰⁾も日本語による日本の番組の放映は禁止されていた。また、番組編成は政府偏重であったため、本省人¹¹⁾の欲求を満たすものではなかった。このような状況の中、非合法のケーブルテレビが登場した。ケーブルテレビは日本の番組やアメリカの番組を放映したことにより人気となり普及していった。その番組の中では日本の番組が最も多かったという(羅2003:52)。

1987年戒厳令が解除され、1998年李登輝¹²⁾政権が発足すると1993年にケーブルテレビの放映が合法化され、これを契機に地上波3局も日本の番組を日本語でも視聴できるようになった。若年層を中心に日本の番組がよく見られるようになり、現在では日本番組専門のケーブルテレビ局¹³⁾も開局している。また、音楽ソフトや映画ソフト、マンガ、アニメといったポップカルチャーも流入しており日本語学習前から見聞きできる環境にあることから、日本や日本の文化に興味を持っており、それが日本語学習に繋がっていることが考えられる。(頼2002:69)

5.7. 日本語学習の継続の意向

Q15. 今後も日本語学習を続けたいと思いますか。



ほとんどの学習者は今後も日本語学習を続けたいと考えているが、それは日本語の有用性を認めているからである。また、ケーブルテレビなどを

通して日本語を見聞きする機会が多くなったため学習意欲が高いと考えられる。

6. まとめ

教育の国際化を目指した李登輝政権下で行われた教育改革により1994年以降日本語教育の開放により高等教育、中等教育において日本語教育が行われるようになり、日本語学習者は増加の一途を辿っている(交流協会2010)。頼(2002:67)によると「9割近くの大学生が日本語を勉強したい」(引用は中時晩報1999による)と思っている。一方、教育部の統計によると、2007年度一学期において第二外国語のクラスを開講している全ての高等学校では日本語クラスを開講しており24,233名が日本語を学んでいるという結果であった。第二外国語履修者の81%が日本語を履修しており最も人気がある外国語である(中華週報:2007)という。このように日本語は英語に次ぐ外国語となっているが、これまでの考察から「仕事に役立つから」という実利的目的で日本語を学習するケースが多いことは先行研究と同様の結果であったが、今回の調査では日本語学習前から日本のポップカルチャーとの接触が多いことから日本や日本の文化に興味を持ち、それが日本語の学習を始めるきっかけとなっていることが明らかになった。これは近年インターネットを通じた情報量の増加のみならず日本のサブカルチャー的なものの流入によるものだと考えられる。特に、テレビを媒体とした日本のポップカルチャーが強く影響している。また、学習を始めてからもテレビなどを通じて日本語に接触しており、それが結果として学習者の学習意欲を高め、日本語学習を向上させようと考えている一因となっている。そして学習が進むにつれ、日本語の重要性を認識し「将来日本語を役立てたい」と思っているのであろう。

一方、日本語学習者の増加を背景に1994年以降日本語教育を始める教育機関が急増し、多くの大学では日本語文学系、応用日語系、高等学校では日文組(日本語コース)を開講しており、選択科目としての日本語クラスを開講するところも年々増えている。しかし、多くの学習者は日本語

によるコミュニケーションの能力の向上を重視しているものの、学校はそれに対応できていないのが現状である。それが日本語の学習は「あまり順調に」進んでいないと感じている学習者が多い一因になっているのではないだろうか。調査対象となっている日本語学習者は時間があれば「補習班」に通い、日本語のコミュニケーション能力を向上させようとしている。多人数クラスの中でいかにコミュニケーションを重視した教育を多く取り入れ、学習効果を上げられるかが今後の台湾における日本語教育の課題と言えよう。これを解決できなければ、せっかく意欲を持って始めても落合(1995)が指摘しているとおりに、学習意欲を失わせることになり日本語学習は困難になることが予想される。また、少子化が急速に進んでいる台湾では各教育機関が学生を獲得するために様々な取り組みをしているが、現在教育部は産官学構想を進めており、本格的にインターンシップが始まろうとしている。今後、日本語学習者は日本語によるコミュニケーション能力向上をより強く求めていくことが予測できる。

注

- 1) 台北市を中心に新北市、基隆市、桃園縣市、新竹縣市を含む地域である。
- 2) 交流協会(2010)によると、南部地域で日本語専門課程を開設している大学は呉鳳技術學院(現在は呉鳳科技大學)、稲江科技暨管理學院、立德大學(現在は康寧大學)、興國管理學院、南台科技大學、致遠管理學院(現在は台灣首府大學)、長榮大學、南榮技術學院、高雄餐旅學院、高雄大學、文藻外語學院、高雄第一科技大學、義守大學、高苑科技大學、和春技術學院、東方技術學院(現在は東方設計學院、樹人醫護管理專科學校、屏東商業技術學院、大仁科技大學の19校であった。ただし、高雄市立空中大學は他の大學とは形態を異にするため除外した。今回の調査により真理大學麻豆校、實踐大學高雄校區の2校においても日本語専門課程が存在していることがわかったため、南部地域の21校となった。
- 3) 理工学部や商業学部などを有する大学は主に科技大學、技術學院という。
- 4) 以前総合大学に日本語文学系を設立されていたが、1990年代南部地域を中心に技術系5年制専科學校(日本の5年制高等専門學校に相当)に応用外語系日文組開設が相次いだ。その後、教育改革により技術系高等専門學校から技術學院や科技大學に昇格させ応用日語系と改称したため、南部地域に技術系大学応用日語系が多い。応用日語系は日本語文学系とは異なり、実用性を重視し4技能以外にもう一つの技能、つまり5技能の教育を目指している。
- 5) 立德大學(現在は康寧大學)、南台科技大學、高苑科技大學、和春技術學院の日本語学習者を対象に調査を行った。
- 6) エスニックグループの中で閩南語(福佬語)話者が最も多いため閩南語が一般に台湾語と呼ばれているが、近年閩南語だけでなく客家語、先住民の言語も含む場合がある。
- 7) 北京官話であるが、現在では北京で使用されている言葉とは多少の偏差を有している。中華人民共和国では日本統治時代に使用されていた「国語」は使用せず、「普通話」と呼んでいる。
- 8) 黄英甫(2001)は台湾にある日本語について「日本語読みで通じる台湾語」「台湾語読みになった日本語」「台湾語になった日本語の外来語」「台湾語になった日本語式表現」の4つに分けている。
- 9) 「短期補習班」ともいう。一般に大学進学のための学習塾のことであるが、最近では日本語学科に入るための補習班も存在する。民間の日本語學校のように日本留学や日本語能力試験対策のためのクラスが設けられているところが多い。
- 10) 台湾の地上波テレビ局は1958年に中華人民共和国がテレビ局を開局したことにより設立された。地上波テレビ局は三局あり、表向きは民間経営となっているが、実質的には経営に関して台湾テレビ(1962年開局)は台湾省政府、中国テレビ(1969開局)は国

民党、中華テレビ（1971年開局）は国防部・教育部が中心に行っていることから放送番組は政府偏重のものとなっていた。1976年に施行されたラジオ・テレビ放送法により使用言語のほとんどが中国語とされ、法的にも日本語の使用は禁止された。

- 11) 一般に1945年中華民国が台湾を接收する以前より台湾に住んでいた漢民族系台湾人のことである。
- 12) 日本統治時代に日本の教育を受けた人物であり、1988年に台湾本省人としては初めて中華民国総統代行となり、その後正式に国民党主席に就任した。1990年第8期総統となり、1996年初めての総統直接選挙で当選し第9期総統に就任した。在任中台湾の本土化を推進し、新しい中学生用歴史教科書「認識台湾（台湾を知る）」を編纂させ日本統治時代を再評価している。
- 13) 一般に「第四台」とも呼ばれている。これはそれまでのテレビは地上波三局の独占状態であったが、4局目のテレビ局という意味で一般にこう呼ばれている。日本製やアメリカ製の映画ソフトを放映したケーブルテレビの普及率が上昇した。当初非合法であったが、1993年に合法化された。

参考文献

- 石井健一・渡辺聡・小計進（2001）『東アジアの日本大衆文化』蒼蒼社。
- 岡本輝彦・小島正弘（1997）「戦後台湾における日本語教育の史的変遷」、『台湾における日本語教育事情調査報告書平成8年度』財団法人交流協会。
- 落合由治（1995）「日本学習に関する実態と意識調査—授業受容に影響を与える要因をめぐって—」、『国際化時代的日語教育』中華民国日語教育学会。
- 甲斐ますみ（1995）「台湾における新しい世代の中の日本語」、『日本語教育』85, 日本語教育学会。
- （1997）「台湾人老年層の言語生活と日本語意識」、『日本語教育』93, 日本語教育学会。
- 交流協会（2010）『2009年度台湾における日本語教育事情調査報告書』財団法人交流協会。
- 黄英甫（2001）「漢語を中心とした台湾語による日本語の教え方」,台湾南部教師会第35回例会発表資料。
- 鮫島重喜（1993）「第二外国語履修における日本語学習者の意識—台湾の専科学生のアナケート調査を通して—」,『台湾日本語文学報』5。
- 篠崎信行（2000）「台湾の高等教育機関における日本語学習者の学習の背景と学習環境」,『日本語言文芸研究』1, 台湾日本語言文藝研究學會。
- 鐘清漢（1993）『日本植民地下における台湾教育史』多賀出版。
- 『中華週報』2007年12月18日号, 台北經濟文化代表處。
- 新プロ「日本語」総括班（1999）「日本語観国際センサス（単純集計表）」（暫定速報版）、国立国語研究所。
- 法務省（2011）「出入国管理統計統計表」
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html。
- 丸川哲史（2000）『台湾、ポストコロニアルの身体』青土社。
- 羅慧雯（2003）「日本製映像ソフトの浸透と台湾の国家政策」,『經濟論叢別冊調査と研究』京都大学。
- （2005）「台湾におけるケーブルテレビ産業の展開とメディア改造運動」,『現代台湾研究』28, 台湾史研究会。
- 頼錦雀（2002）「台湾における「哈日」現象と日本語教育」,『天理台湾学会年報』11, 天理台湾学会。
- （2012年1月10日受付、2012年2月9日再受付）